〇月〇日

私、藤崎直子は本日をもちまして、N団地にお住まいになる御爺様たちの、アナル奴隷になりました。

……事の始まりは……あの時から……。

団地妻と年金暮らしの爺さんたち

～アナル調教日誌～

第一話　老人

N団地。最近は若者の入居者も減り、空き部屋が目立つようになってきた。

雪が降り積もる十二月の昼下がり――

白色の縦編セーターまとい、藍色のスカートを穿いた色白の美熟女が、便座に腰を下ろしていた。

彼女の名は、藤崎直子。夫の純一の転勤でN団地に二ヶ月前、引っ越してきた。夫との間には娘が一人いる。今は学校で授業を受けている頃。夫も会社だ。

直子が気張っている場所は自宅便所。家族が誰もいないため、遠慮せず思いっ切り排泄できる筈である。だが、出来ない。出ないのだ。彼女は便秘気味で困っていた。

ピンポーンッ

「ビクッ！」

むちむちの熟尻が跳ねた。排便のため集中しようとしていた矢先、インターホンの音が鳴り響く。

「……誰か来たわね……。でも、申し訳ないけど、また後で来て貰いましょう……」

ピンポーンッ　ピンポンピンポンッ

インターホンが連呼する。余りのしつこさに集中力が途切れてしまい、便が完全に引っ込んでしまった。

「……もう……仕方ないわね……」

後ろ髪を引かれながら、腰を上げるのであった。

膝まで下ろしていたショーツを穿くと、便所から出て、足早に玄関へ向かう。
ショートヘアーをなびかせ、男の手の平に余るような巨乳巨尻を揺らす。

――一時間ほど前に来た宅配の若い男性は、目が彼女の胸や尻に釘付けになっていた。
当の本人である直子は、男の気持ちなど気付きもせず、鼻歌交じりで受け取り印を押していた。
自分が男を虜にする豊熟した美貌をもっていることなど思ってもいない。むしろ、この肉づきの良い身体をよく思っておらず、痩せたいとしか考えていない――。

「お待たせしました。どなたですか？」
直子は玄関ドアを開け来客に笑顔で声をかけた。

「ひいッ――」
思わず、息を呑む直子。
ドアを開けた先には、不気味な笑みを浮かべる老人が立っていた。
「奥さん、お取り込み中に悪いのぉ……」

「……何のご用ですか……？」
直子は意識して声を抑えながら訊いた。
「回覧板を届けに来ただけじゃ」
「……そうでしたか。有難うございます」
静かに回覧板を受け取ると、一礼をして家の中にすぐ戻り、玄関ドアの鍵を閉めるのであった――。

老人の名は、佐久間宗吉。藤崎家の隣に住む独居老人である。引っ越してきた当初は、隣人ということで彼を頼ったが、それが間違えであった。

直子は、この団地に引っ越してきて二ヶ月経つが、この老人のことが好きになれない。会う度にいやらしい顔で卑猥なことを言ってきたり、また、監視されているような異常な干渉を見せ、恐怖さえ感じるからである。

宗吉の執拗な嫌がらせに耐え切れなくなった直子は――

「もういい加減にして下さい！　佐久間さんと私は赤の他人です。私たちに干渉するのはやめてください！」

と、彼を叱り付けた。すると、宗吉は土下座をして謝罪してきたのだ……。

それから顔を合わせることが、ほとんど無かったが……

宗吉は直子に回覧板を渡すと、自分の部屋に戻らず、上の階へ消えて行った。

宗吉が去って行ったことで胸を撫で下ろした直子は、再び便所で頑張るのであった。

「……くぅ……！　ふぐっ、んんっ……」

中に溜まったものを、ひり出そうと、額に汗を滲ませながら腹に力を込める。

一昨日から排便をしていないため、下腹部がパンパンになって苦しい。早く楽になりたい。

「んんっくぅっ……そろそろ出てちょうだい……」

すると、懸命な粘りもあってか、ついに強い便意を感じ始めた。そして、肛門が盛り上げる。

ぶりぶりぶりぃ……ぶりりりりりっ！

腹の中に溜まった汚物を、便器の底へ次ゝに落としていく――ニオイが下から漂ってきて、顔をしかめる。

早く立ち去りたいところだが、せっかくの便意を無駄にはしまいと、最後の玉が尽きるまで粘る。

「んんはぁ……ふぅぅぅっ……」

大便を出し切った人妻は、安堵の溜め息を漏らす。

トイレットペーパーで肛門にこびり付いた付着物を、入念に拭き取ると、それを底に落とし、便所の水を流す。

「そういえば、あの回覧は……」

宗吉から受け取った回覧板は、至急回覧であったことを思い出す――。

第二話　誘い

用を足し終えた直子は、すぐに回覧に目を通し、次に回す二階の部屋へ届けに来た。

だが、呼び鈴を鳴らすが、一向に中の住人は現れない。

「留守かな……？」

諦めて、その次に回す部屋に行こうとすると――

「……あんっ……んっはぁん……」

「――ッ!?」

直子は初め、何が聞こえているのか分からなかった。

だが、よく耳を澄まして聞いてみると……それは男女が愛し合うときに、女性から出る声――嬌声である。直子の顔がドンドン紅潮していく。

（……何ていやらしい声……。純一さんと最後にしたのはいつだったかしら……）

女性の声が聞こえなくなると――突然、部屋のドアが開き、肌が透けて見えるキャミソール姿の女性が現れた。
直子は、盗み聞きをしていたことに後悔を抱き、ばつが悪そうな顔をしてしまう。

「……あら？　確か、あなたは……？」
この部屋の住人の増田香織である。直子と年齢が近いことは耳にしていたが、香織をあまり外で見ないため、交流がほとんど無かった。

「……下の階の藤崎です。すみません、回覧板をお届けに来ました」
「そう……ありがとう……ふふっ……」
香織は回覧を受け取ると、艶かしい笑みをこぼしながら、部屋へ戻って行く……辺りに甘い香りを残して……。

第三話　再訪

十二月五日

回覧板を増田さんに届けた後、実は少しアソコが……濡れていました。だって、あんなエッチな声を聞かされて、しかも、乳首が見える、あんないやらしい格好をしていたんですもの……。

純一さん……今日も残業かな……？　たまには相手して下さいね……。

平日の昼前。宗吉が藤崎家をまた訪れていた。

「そんな嫌な顔をしないでくれや。今までの詫びじゃ。ほれ、昼にでも食ってくれ。ワシが借りてる畑から取れた大根で作ったものじゃ」

と、言って宗吉は直子に大根と鶏の煮物を差し出した。

彼女は捨てようかと考えたが、節約志向の主婦としては腐ってそうでもないので食べてみることにした。

昼下がりには、再び宗吉が現れ、

「お口に合ったかのぉ？　では、容器を返して貰うぞ。奥さんは家事で忙しいじゃろうから、ワシが台所まで取りに行ってやるわい」

「ちょ、ちょっと勝手に入らないで下さいっ――!!」

老人は直子の制止を無視し、図々しく他人の家に足を踏み入れていく――。

「台所はどこかのぉ？」

「出て行って下さい、佐久間さん！」

宗吉に追いついた直子だったが――

「キャッ！」

自分の尻に何かが触れる感触がし、悲鳴を上げる直子。

「デカくて、むちむちのイイケツしておるのぉ」

「んんっ……さ、佐久間さん……やめて下さいっ」

後ろから人妻のでん部を撫で回した老人は、更に股間の前方も弄り出す。

「よしよし、パンティーが少し湿っておるな。あの煮物には媚薬を混ぜておいたんじゃよ、ひひひっ……」

「び、媚薬ッ!? あなたって人は……。わ、私は感じてなんかいませんから……あんっ！」

続けざまに、老人の指が下着越しの尻の割れ目をなぞり出すと、肛門に触れ、ツンツンと突く。そして、グリグリとほじくり出す。

「感じてないと言う割には、抵抗しないではないか」

宗吉は下品な笑みを浮かべながら、責め立ててくる。

「ああんっ……んんぐっ……」

(逃げ出したいのに身体がいうことをきかない……。それに、さっきから身体も熱い……)

直子は突然の受難にすくみ上がっていたが、やられるがままなのは、他にも理由があるようだった……。

「んっ!? んんんっ!」
「ぢゅるるるっんちゅ……奥さんの口の中、甘いのぉ」
老人は人妻の唇を強引に奪うと、口内に舌を入れ掻き回す。そして、彼女の唾液を吸い上げる。どちらのものか分からない唾液が、ねっとりと落ちていく。
「らめぇ……んんっはぁ……」
老人の指は、尻穴を弄くることも忘れない。直子の身体がビクッと反応し、心臓の鼓動が早くなり、肌から汗が滲み出てくる。

「嫌ぁッ！　オッパイ触らないでぇ……」
宗吉は、今度は直子を壁際に追い込むと、彼女のセーターをまくり上げ、涎を垂らし乳首に吸い付き舐める。
同時に、鷲掴みした熟れた乳房を乱暴に揉み出す。
「ひぃあんっ！　い、痛いっ！　離してぇ……！」
「乳もケツに負けずデカいわい。柔らかくて揉み応えあるわい。こんなやらしい身体を旦那は好きにできるのか。旦那が羨ましいのぉ」
「んっ、主人は、私の身体をそんな風に見ていません……」
「ひひひっ……男のことを何も分かってない、うぶな奥さんじゃのぉ。男は皆、エロいんじゃ。もしかしたら、今頃、旦那は会社の女をハメとるかもしれんぞ」
「主人への侮辱は許しません……キャッあんっ！」
老人は更に強い力で乳房を揉み上げ、彼女に嬌声を上げさせる。

そして、乳首を咥える力も強くし、甘噛みも加えていく。
「んんんはぁっ……らめぇ……」
人妻の声が甘く切なくなっていく。
「ケツだけじゃなく、乳でもイイ感じっぷりじゃ。旦那とはご無沙汰で、溜まってるんじゃないか？」
「な、何をッ!?」
「ひひひっ……図星かのぉ。今日はワシが旦那の分も、たっぷりと可愛がってやるからのぉ」

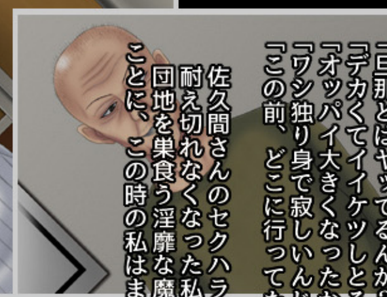
熟尻を突き出す姿勢を強いられる直子。
ショーツの布地が尻の割れ目に食い込み、淫猥なポーズを男に見せつける形になった。

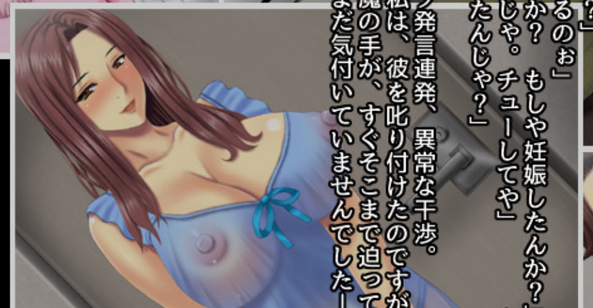
「やっぱり奥さんといえば、このやらしいケツじゃのぉ」
「くっ……これ以上、変なことをするつもりでしたら、人を呼びますよ……？」
ようやく身体が動くようになった直子は、反撃に出たが――
「……呼べばよろしい。だが、いいのか？　ワシにされたことを他人が知ることになるんじゃぞ？　終わったら、すぐに帰ってやるから、少し我慢せえ」
「……っ……」

再び大人しくなった人妻。チャンスとばかりに老人は、彼女の股間に顔を押し付ける。
「キャッ！」
「んん～、クンカクンカ。奥さんのオマンコ、蒸れていて少し匂うぞ。やらしい匂いがのぉ」
「んっ、嫌っ……そんなとこ、匂わないで……」

更に、老人の舌が股布越しのヴァギナの割れ目を舐め出す。
「んぢゅ……んん……ちょっとオシッコのニオイもするわい。ええ香りじゃ……」
「ああんっ！　言わないでぇっ……」
人妻は身をよじらせ、脂の乗った太股がクネクネと身悶え、その度に肉がたっぷり詰まったヒップが、ぷるんぷるんと弾けるように揺れる。

体験版は以上でございます。
お求めいただき、ありがとうございました。
続きは製品版にて、ご覧くださいませ。





る十二月。
者の入居者も減り、高齢の居住者が目
ました。
は、夫の転勤で、ここN団地に引っ越
ない環境に戸惑う毎日。
らしい顔で接してくる佐久間宗吉とい

「旦那とはヤッてるんか？」
「デカくてイイケツしとるのぉ」
「オッパイ大きくなったか？　もしや妊娠したんか？」
「ワシ独り身で寂しいんじゃ。チューしてや」
「この前、どこに行ってたんじゃ？」

佐久間さんのセクハラ発言連発、異常な干渉。
耐え切れなくなった私は、彼を叱り付けたのですが
団地を巣食う淫靡な魔の手が、すぐそこまで迫って
ことに、この時の私はまだ気付いていませんでした